

〔菅原道真研究―菅家後集〕全注釈（二十一）―

〔国語国文学研究〕第四十六号 九十四―九十五頁）

今回、「486 哭奥州藤使君 九月廿二日 四十韻」に全句にわたって注釈を施した上で考察を施すと、内容上からも、前述の筆者の論を裏付けることが出来るように思う。

その点を、先に挙げた「484 敘意一百韻」「485 秋夜 九月十五日」二首及び本稿の「486 哭奥州藤使君」の三首を並記し、三作品に流れる「詩情」を通して言及してみる。

筆者の論旨を明確にするために、まず大まかな図式化を試みる。

### 〔三詩の制作年時〕考

① 「484 敘意一百韻」

（陰曆九月十五日直前）



〔根拠〕

139 句目 「九見桂華圓」

（今年に入って九回目の満月を迎えた）

